

曇鸞の往生觀考

梶原隆淨

一、はじめに

曇鸞（四七六、五四二）は、初め四論・仏性を學し、後に菩提流支より『觀無量壽經』を授けられて以降、淨土教に歸入したとされているが、曇鸞の淨土教に関する著作としては、『無量壽經優婆塞提舍願生偈婆藪槃頭菩薩造並註』（以下『往生論註』と略す）・『讚阿彌陀佛偈』・『略論安樂淨土義』の三部が伝えられている。その中、主著と言うべき『往生論註』は、道綽が『安樂集』にその文を数多く引用していることから窺えるように、後の淨土教者に多大な影響を与えたばかりでなく、中国仏教の中に淨土教を植え付けるに至った重要な書物である。曇鸞は、『往生論註』の冒頭に、

謹案、龍樹菩薩十住毘婆沙云、菩薩求阿毘跋致有二種道。一者難行道二者易行道。難行道者、謂於五濁之世於無佛時一求阿毘跋致爲難。此難乃有多途。粗言五三以示義意。一者外道相善亂菩薩法。二者声聞自利障大慈悲。三者無顧惡人破他勝德。四者顛倒善果能壞梵行。五者唯是自力無他力持。如斯等事觸目皆是。譬如陸路步行則苦。易行道者、謂但以信佛因緣願生淨土、乘佛願力便得往生彼清淨土。佛力

住持即入^①大乘正定之聚。正定即是阿毘跋致。譬如^②水路乘船則樂。此無量壽經優婆塞、蓋上行之極致不退之風航者也。

と説いているように、当時の世間を、釈迦が滅して久しい無仏の時であり、菩薩の法や行も乱れた五濁・乱世であると捉えている。この様な五濁の世・無仏の時に不退転を得ることは、まさに難行であるから、信仏因縁によって仏願力に乗じて浄土に往生し、さらには不退転に至ることのできる信方便易行に依らんとするのである。そして曇鸞は、世親の著した『無量壽經優婆塞提舍願生偈』（以下『往生論』と略す）の所説こそ信方便易行を説き明かすものであり、大乘仏教の極致であると理解したのである。

『往生論』というのは、禮拜門・讚歎門・作願門・觀察門・回向門という五念門を修すことによって、浄土往生さるには速やかに阿耨多羅三藐三菩提を得ることを目的として著されたものであるが、山口益氏が「瑜伽唯識時代に、瑜伽唯識の思想家であった世親が、その教学の立場で、瑜伽唯識の思想を素材にして浄土の法門をウパデーシャ^③したものと説かれているように、瑜伽唯識の立場から浄土教を解釈したものである。一方、曇鸞は四論・仏性を学んだとあるように、龍樹の教学である般若・中観思想をその思想的素地としている。このような思想的基盤の相違に、痛切なる無仏観・時機観の相違等の様々な要因が合わさって、『往生論註』では曇鸞独自の浄土教が展開されるのである。『往生論註』に説かれる五念門は、奢摩他・毘婆舍那すなわち止観双修を中心とする高度な菩薩行であるから、願生者も止観双修に耐え得るだけの機根が必要であると考えられる。しかし『往生論註』では、凡夫の往生・早作仏が説かれており、それがまた曇鸞浄土教の特色であると言える。

本稿では、この『往生論註』の所説によって、曇鸞の往生観の特色である無生而生・見生而無生について考察し、

さらに信方便易行として説かれる十念と五念門について考察することによって、凡夫がいかにして往生・早作仏を得ることができののかを究明していくことにする。

二、無生而生と見生而無生

曇鸞の往生に対する理解は、無生而生と見生而無生の二義であると考えられる。この二義について考察する前に、曇鸞が往生者の機根について、どの様に捉えていたのかをみてみることにする。『往生論註』上巻末、八番問答中の第一問答には、

問曰、天親菩薩回向章中言「普共諸衆生往生安樂國」此指レ共「何等衆生」耶。答曰、案「王舍城所説無量壽經」佛告「阿難、十方恒河沙諸佛如來皆共稱「嘆無量壽佛威神功德不可思議。諸有衆生聞「其名号、信心歡喜乃至一念至心回向願「生「彼國、即得「往生「住「不退転。唯除「五逆誹「謗正法。案「此而言一切外凡夫人皆得「往生。又如「觀無量壽經「有「九品往生。下下品生者、或有「衆生「作「不善業五逆十惡「具「諸不善。如「此愚人「以「惡業「故「心墮「惡道「經「歷多劫「受「苦無「窮。如「此愚人「臨「命終「時遇「善知識種種安慰為説「妙法「教令「念佛。此人苦逼不「遑「念佛。善友告言、汝若不「能念者「必「稱「無量壽佛。如「是至心「令「声不「絕具「足十念「稱「南無無量壽佛。稱「佛名「故、於「念念中「除「八十億劫生死之罪。命終之後見「金蓮華猶如「日輪「住「其人前。如「一念頃「即得「往生極樂世界」。於「蓮華中「滿「十二大劫「蓮華方開。觀世音大勢至以「大悲音声「為「其広説「諸法実相除滅罪法。聞已歡喜心「時則発「菩提之心。是名「下品下生者。以「此經「証、明知。下品凡夫但令「下「不「誹「謗正法「信佛因縁皆

得_レ往生_二。

と説かれてゐる。すなわち曇鸞は、往生の機根は、『無量壽經』に説かれる一切の外凡夫人であり、『觀無量壽經』に説かれる下品下生の凡夫であるとす。つまり、五逆十惡をなす下品の凡夫であっても往生できるとするのである。このように、曇鸞は往生者の機根を凡夫と捉えるのであり、それによって、曇鸞特有の往生觀が生み出されるのである。それでは次に、曇鸞の往生觀についてみていくことにする。

曇鸞は、『往生論註』上卷の歸敬偈の解釈中に、「我一心」という語を解釈して

我一心者、天親菩薩自誓之詞。言念_二無礙光如來_一願_レ生_二安樂_一。心心相統無_二他相間雜_一。問曰、佛法中無_レ我。此中何以稱_レ我。答曰、言_レ我有_三根本_一。一是邪見語、二是自大語、三是流布語。今言_レ我者、天親菩薩自指之言。用_二流布語_一。非_二邪見自大_一也。

と説き、世親が我と言ふのは自我を指すものではないとして、往生の主体となる我の存在を否定する。そして「願生」という語については、

問曰、大乘經論中處處説_三衆生畢竟無生如_二虛空_一。云何天親菩薩言_二願生_一耶。答曰、説_三衆生無生如_二虛空_一有_二二種_一。一者如_二凡夫所謂_レ實衆生_一。如_レ凡夫所_レ見_二實生死_一。此所見事畢竟無_二所有_一。如_レ龜毛_一。如_二虛空_一。二者謂_レ諸法因緣生故即是不生。無_二所有_一。如_二虛空_一。天親菩薩所_レ願生_二者是因緣義_一。因緣義故假_レ名生。非_レ如_二凡夫謂_レ有_二實衆生_一實生死_一也。問曰、依_二何義_一説_二往生_一。答曰、於_二此間假名人中_一修_二五念門_一。前念與_二後念_一作_レ因。穢土假名人淨土假名人不_レ得_二決定_一。不_レ得_二決定_一異。前心後心亦復如_レ是。何以故、若_一則無_二因果_一。若_一異則非_二相統_一。是義

觀一異門。論中委曲。

と説いているように、凡夫は自身が実の存在であり実の生死があると捉えるが、諸法は因縁によって生じるものであるから本来は不生である。世親が願生というものは、この因縁の義によるものであり、実の衆生による実の生死を言うのではないとしている。そして往生というものは、仮名人（7）、すなわち我という実存在を持たない因縁によって成り立つものが、念念相続する過程において、此土での最後の念が因となり果である浄土での最初の念になるということであり、因縁による生であるとする。そしてさらに、穢土の仮名人と浄土の仮名人の關係は、因果によるものであるから一ではなく、念念相続するのであるから異でもない、不二不異の關係にあるとするのである。これがすなわち無生の義であるが、この無生というのは、『中論』第二十四品、第二十二偈に、

衆因緣生法 我說即是無 亦為是假名 亦是中道義（8）

と説かれているように、諸法は因縁生であるから空であり仮名であるとする第一義諦に立ったものの捉え方である。曇鸞は、般若・中觀を思想的素地とするのであるから、無我・無生という義には通達していたと考えられる。そして、無我については「仏法中」、無生については「大乘經論中処」に説かれる義であるとしている点からみて、通仏教的にもこのような解釈がなされていたことが窺える。しかし、この解釈をもって直ちに曇鸞の往生に対する理解ということはできない。その理由は、曇鸞は衆生について、上卷、国土莊嚴積の末に、

問曰。有論師汎解衆生名義。以下其輪三有受中衆多生死故名衆生。今名佛菩薩為衆生。是義云何。答曰。經言一法有無量名一名有無量義。如下以受衆多生死故名爲衆生上者。此是小乘家積三界中衆生名義。非大乘家衆生名義也。大乘家所言衆生者、如三不增不減經言。言衆生者、即是不生不滅義。何以故、若有生生已復生。有無窮過故有不生而生過故、是故無生。若有生可滅。既無生何得滅。是故無生無

滅是衆生義。⁹⁾

と説いていることより窺える。これは、衆生という語には、三界において生死輪廻する衆生を指す場合と、無生無滅である大乗家の衆生を指す場合の二義があることを明かすものであるが、この中、前者は凡夫、後者は聖者を指したものであると受け取ることができる。したがって無生という義は、聖者において理解されるところの義であり、凡夫には到底理解できない義であるということになる。従って、もしも曇鸞が往生は無生であるとのみ理解していたのであれば、そこから凡夫の往生という説は出てこなかった筈である。¹⁰⁾ それでは曇鸞は、凡夫の往生をどのように捉えているのであろうか。次に、無生而生と見生而无生についてみていくことにする。

曇鸞は、下巻、觀察体相中、国土莊嚴積の末に、

疑言。生為_レ有本衆累之元。棄_レ生願_レ生何可_レ尽。為_レ積_レ此疑。是故觀_レ彼淨土莊嚴功德成就。明_レ彼淨土是阿彌陀如来清淨本願無生之生。非_レ如_レ三有虚妄生_レ也。何以言_レ之。夫法性清淨畢竟無生。言_レ生者是得生者之情耳。生苟無生生何所_レ尽。¹¹⁾

と説いている。すなわち、生というのは三界輪廻の根元となる惑である。もし此土での生を棄てて淨土往生を願うとしようであれば、生という惑を滅することはできないであろうという疑いが生じる。この様な疑いを晴らすため、淨土の莊嚴を觀察するのであるが、淨土往生の義は三界における生を超越したものであり、畢竟無生の淨土に生じるといふ無生而生であるとする。この無生而生の義は、聖者が理解するところの無生よりも一步凡夫側に進んだ解釈であると思われるが、この義をより深く考察するため、曇鸞の淨土觀をみてみることにする。

曇鸞は、下巻の觀察体相中、国土莊嚴積の末に、

入第一義諦者、彼無量壽佛国土莊嚴第一義諦妙境界相。十六句及一句次第説應レ知。第一義諦者、佛因縁法也。此諦是境界義。是故莊嚴等十六句稱為「妙境界相」。此義至「入一法句文」當「更解釈」。

と説いているように、浄土というのは第一義諦より顯現された妙境界相であるとする。そしてさらに下巻の浄入願心中、入一法句文釈に、

略説「入一法句」故。上国土莊嚴十七句、如來莊嚴八句、菩薩莊嚴四句為レ広。入一法句為レ略。何故不レ現広略相入。諸佛菩薩有レ二種法身。一者法性法身、二者方便法身。由レ法性法身生レ方便法身、由レ方便法身出レ法性法身。此二法身、異而不レ可レ分、一而不レ可レ同。是故広略相入統以レ法名。菩薩若不レ知「広略相入」、則不能「自利利他」。一法句者謂清淨句、清淨句者謂眞実智恵無為法身故。此三句展転相入。依「何義」名之為レ法、以「清淨」故。依「何義」名之為レ清淨、以「眞実智恵無為法身」故。眞実智恵者実相智恵也。実相無相故眞智無知也。無為法身者法性身也。法性寂滅故法身無相也。無相故能無レ不レ相。是故相好莊嚴即法身也。無知故能無レ不レ知。是故一切種智即眞実智恵也。以「眞実」而目「智恵」、明「智恵非」作「非作」也。以「無為」而標「法身」、明「法身非」色非「非色」也。非「于非」者豈非「非」之能是乎。蓋無「非」之曰「是」也。自是無「待復非」是也。非「是非」非百非之所「不」喻。是故言「清淨句」。清淨句者謂眞実智恵無為法身也。

と説いているように、三種二十九句で表される浄土の莊嚴は、略説すれば一法句に収まるものであるとする。曇鸞は、この広略相入の義について、法性法身と方便法身の二身によって解釈する。法性法身というのは一法句すなわち眞実智恵、方便法身というのは三種二十九句で表される浄土の莊嚴功德相を指すものであるが、法性法身によって方便法身を生じ、方便法身によって法性法身を出すと説かれているように、すべてに通達する一切種智によって、衆生救済

のための淨土相を現し、その淨土相に衆生を迎え入れることによって、新たなる眞実智慧者を出さんとする義を明かすものである。従つて淨土というのは、眞実智慧によつて、衆生救済のために有相の土として顕現されたものであるから願生が可能となるのであり、またこの淨土相は、眞実智慧という実相無相に収まるものであるから往生は無生であるということになる。このように、曇鸞は淨土を有相化された土であると捉えるから、往生は單なる無生ではなく無生而生であると説くのである。しかし、この無生而生を理解するためには、広略相入の義を理解しなければならず、凡夫には未だ理解しがたい境地であると言える。その点について曇鸞は、同じく国土莊嚴の末に、

問曰、上言^レ知^レ二生無生^一當^レ是上品生者。若下下品人乘^二十念^一往生、豈非^レ取^二実生^一耶。但取^二実生^一即墮^二二執^一。一恐不^レ得^二往生^一、二恐更生^レ生^レ惑。答、譬如^レ淨摩尼珠置^二之濁水^一、水即清淨。若人雖^レ有^二無量生死之罪濁^一、聞^二彼阿彌陀如來至極無生清淨宝珠名号^一、投^二之濁心^一、念念之中罪滅心淨即得^二往生^一。又是摩尼珠以^二玄黄幣^一裹投^二之於水^一、水即玄黄一如^二物色^一。彼清淨佛土有^二阿彌陀如來無上宝珠^一、以^二無量莊嚴功德成就帛^一裹投^二之於所^一往生^二者^一心水^上、豈不^レ能^レ轉^二生見^一為^二無生智^上乎。又如^レ氷上然^レ火、火猛則氷解、氷解則火滅。彼下品人雖^レ不^レ知^二法性無生^一、但以^レ称^二佛名^一力^上作^二往生意^一願^レ生^二彼土^一、彼土是無生界、見^レ生之火自然而滅。¹⁴⁾

と説いている。すなわち、往生は無生而生であるのに、凡夫は実の生に執着して往生を願う。このような執着があれば、それが妨げになり往生することができないか、あるいは往生してもまた惑を生じるのではないかという疑いが生じる。この点に対し、(1)阿彌陀仏の至極無生清淨宝珠の名号を聞けば念念に罪滅して往生を得る。(2)淨土に往生すれば、阿彌陀仏の無量の莊嚴功德成就によつて、生見を轉じて無生智を得る。(3)法性無生を知らなくても、仏名を称し淨土往生を願えば、見生を滅することができるとする。これが見生而無生という理解であり、曇鸞は、聞名号・淨土莊嚴・

称仏名の功德によって凡夫が浄土に往生し、無生の智を得ると説くのである。従って、凡夫が浄土に往生し無生を得るのは、阿弥陀仏の他力によるものであると言えるが、これは、下巻の觀察体相中に

此云何不思議。有_レ凡夫人煩惱成就、亦得_レ生_レ彼浄土、三界繫業畢竟不_レ牽。則是不_レ断_レ煩惱_レ得_レ涅槃分。焉可_二思議_一。

と説いているように、煩惱を断ぜずして涅槃の分を得るといふ、凡夫の理解を超越した、不可思議な境地を説くものである。

以上をまとめてみると、曇鸞は、浄土往生というのは第一義諦によって解釈すれば念念相続による因縁生であるが、たとえこの無生の義を理解できなくても、阿弥陀仏の不可思議力を信じ、他力に乗じて往生すれば、無生而生を得ることができると捉えていたものと言える。

それでは次に、見生而無生を得るための行について、特に阿弥陀仏の不可思議力と、それに対する信という点に着目して、考察していくことにする。

三、十念と五念門

前述した如く、曇鸞は『往生論註』上巻末、八番問答の第一問答において、往生者の機根は『無量寿経』所説の一切の外凡夫人であり、『観無量寿経』所説の下品下生の凡夫であるとする。そして、五逆十悪をなす凡夫であっても、十念称名すれば罪が滅して往生できるとするのである。それでは、まずこの八番問答に説かれる十念についてみてい

くことにする。

曇鸞は、五逆十惡と十念の關係について、第六の問答に、

答曰、汝謂_レ五逆十惡繫業等_二為_レ重、以_二下下品人十念_二為_レ輕、_レ應_下為_レ罪所_レ牽先墮_三地獄_一繫_中在_三界_上者_レ今當_レ以_レ

義按_二量輕重之義_一。在_レ心、在_レ緣、在_レ決定、不在_レ時節久近多少_二也。云何在_レ心。彼造罪人自依_二止虛妄顛倒

見_レ生、此十念者依_二善知識方便安慰_一聞_レ實相法_二生。一實一虛。豈得_二相比_一。譬如_二千歲闇室光若暫至_一即使明朗_二

豈得_レ言_レ闇在_レ室千歲而不_レ去耶。是名_二在心_一。云何在_レ緣。彼造罪人自依_二止妄想心_一依_二煩惱虛妄果報衆生_一生、

此十念者依_二止無上信心_一依_レ阿弥陀如来方便莊嚴真實清淨無量功德名号_二生。譬如_レ有人被_レ毒箭所_レ中截_レ筋破_レ

骨、聞_レ滅除藥鼓_二即箭出毒除_一。豈可_レ得_レ言_レ彼箭深毒厲聞_二鼓音聲_一不能_レ拔_レ箭去_レ毒耶。是名_二在緣_一。云何在_二

決定。彼造罪人依_二止有後心有間心_一生、此十念者依_二止無後心無間心_一生。是名_二決定_一。按_二量_三義_一、十念者重。

重者先牽能出_三有_二兩經_一一義耳。⁽¹⁶⁾

と説いている。これは三在釈と言われるものであるが、すなわち十念というのは、(1)聞實相法、(2)方便莊嚴真實清淨無量功德名号、(3)無後心無間心より生じるものであり、心・緣・決定という点において五逆十惡より遙かに重いものであるから、十念によって往生することができるのである。三在釈というのは、淨土往生の教えを聞くことによつて決定の信を起こし、阿弥陀仏の無量功德の名号を緣として、一心に十念相統することを説くものであるが、この聞實相法・称仏名というのは、前述した見生而無生に説かれる聞名号による罪滅・称仏名による見生の滅と共通するものであるから、十念というのは、阿弥陀仏の不可思議力に乗じた往生行であると言える。このように、曇鸞は往生行として十念を説くのであるが、今、前述した八番問答の記述を見ると、第一問答の下下品の文には「臨命終

時」と説かれ、さらに三在釈の在決定には「無後心無間心」と説かれてゐる点からみて、十念による往生人というのは、臨命終時の凡夫を指すものと考えられる。また十念の内容について、第七の問答では、

問曰。幾時名爲一念。答曰。百一生滅名二刹那。六十刹那名一念。此中云念者、不取此時節也。但言憶念阿弥陀佛。若総相若別相、隨所觀縁心無他想念十念相続名爲十念。但称名号亦復如是。^①

と説いてゐる。すなわち、阿弥陀仏の総相別相を憶念することを念といい、他想を雑えず念念相続することを十念と云うのであり、称名も同様の義であるとするのである。従つて、十念といふのは、臨命終時の凡夫が、善知識の教えに遇つて初めて信決定し、命終までの僅かな時間を費やして憶念もしくは称名を相続することであり、他想を雑えず念念相続することにその意義があると言へる。

以上をまとめてみると、曇鸞の説く十念といふのは、阿弥陀仏の不可思議力にたいする決定の信と、念念相続という義に基づくものであり、臨命終時という時間の限られた者に対して説かれる行ということになる。それでは、その他の凡夫はどの様な行を修すればよいのであろうか。それがすなわち五念門という行であると考えられるから、次に曇鸞の五念門に対する解釈をみていくことにする。

まず初めに礼拝門については、上巻の三念門釈中に、

何以知、帰命是礼拝。龍樹菩薩造阿弥陀如来讚中、或言稽首礼一或言我帰命一或言帰命礼。此論長行中亦言修五念門。五念門中礼拝是一。天親菩薩既願往生。豈容不礼。故知帰命即是礼拝。^②

と説き、下巻の起観生信中、礼拝門釈に

爲下生彼国意上故。何故言此。菩薩之法常以三昼三時夜三時一礼十方一切諸佛。不三必有願生意。今此常

作「願生意」故礼「阿弥陀如来」也。¹⁹⁾

と説いている。すなわち、礼拝門というのは、常に願生の心を作して礼拝することであり、それは阿弥陀仏に対する帰命を現すものであると解釈するのである。従って、この礼拝門というのは、阿弥陀仏の不可思議力に対する決定の信を、身を以て現したものと云うことができる。

次に讚歎門については、下巻の起觀生信中、讚歎門釈に、

称彼如来名者、謂称「無礙光如来名」也。如彼如来光明智相者、佛光明是智慧相也。此光明照「十方世界」無「有」障礙。能除「十方衆生無明黑闇」。非「如」日月珠光但破「空穴中闇」也。如彼名義欲如「実修行相応者、彼無礙光如来名号能破」衆生一切無明、能滿「衆生一切志願」。然有「称名憶念而無明由在而不滿」所願「者」何者。由「不」如「実修行」與「名義」不「中」相「應」。謂「不」知「如来是実相身是為物身」。又「有」三「種」不「相」應。一者「信心不淳」、若「存若亡」故。二者「信心不」一、無「決定」故。三者「信心不」相「統」、餘念間故。此三句展転相成。以「信心不淳故無」決定、無「決定」故念不「相統」。亦可念不「相統」故不「得」決定信、「不」得「決定」故心不「淳」。與「此相違名」如「実修行相応」。是故論主建言「我一心」。²⁰⁾

と説いている。すなわち、名号には破闇滿願の功德があり、如実に修行して名義と相応すれば、一切の無明を破すことができるとするのであるが、不相應の理由として、一不知・三不信を説く。一不知とは、如来は実相身・為物身と知らないことであるが、実相身は智、為物身は光明・名号を指すものである。つまり、阿弥陀仏は智慧と慈悲が円満した仏であり、その名号を称えることがそのまま光照を蒙ることであると知らないから、相応することが出来ないということである。三不信とは、(1)信心不淳、(2)信心不一、(3)信心不相統であるが、これは、(1)↓(2)↓(3)または(3)↓(2)

↓(1)と展転相成すると説かれている。従って、如実修行相應のためには、信心淳・信決定・信相続が必要であり、いづれか一つが欠けてもいけないことになる。また、この二不知と三不信の關係は、如来は実相身・為物身であると知らないから、信が淳・決定・相続しないのであり、その義を知ることによって、信淳く決定し相続するものと考えられる。そして、決定の信を起こし、信相続して名号を称えることによって名義と相應し、破闇滿願の功德、すなわち往生を得ることができるのである。この讚歎門に説かれる信決定と信相続というのは、前述した十念と共通するものである。従って、命終者の往生行として説かれた十念の義は、五念門では名義相應行である讚歎門という形で説かれていると言える。

次に作願門については、上巻の帰敬偈積の中に、

願生安樂國者、此一句是作願門。天親菩薩歸命之意也。⁽²⁾

と説き、さらに下巻の起觀生信中、作願門釈に、

云何作願。心常作願、一心專念^三畢竟往^一生安樂國土。欲^三如実修^二行奢摩他^一故。訳^二奢摩他^一曰^二止^一。止者止^二心

一處^二不作^一惡也。——(中略)——奢摩他云^二止者^一今有^二三義^一。一者一心專念^二阿弥陀如来^一願^二生^一彼土、此如

来名号及彼國土名号能止^二一切惡^一。二者彼安樂土過^二三界道^一。若人亦生^二彼國^一自然止^二身口意惡^一。三者阿弥陀如来正覺住持力自然止^二求^一声聞辟支佛^一心。此三種止從^二如来如実功德^一生。是故言^二欲如実修行奢摩他^一故。⁽²⁾

と説いている。曇鸞は、この作願門も歸命であるとするが、奢摩他を止と言うのは心を一処に止めて悪を作さないことであるとし、さらに、(1)願生の念を起こせば名号の力用によって一切の悪を止む。(2)淨土に往生すれば身口意の悪を止む。(3)阿弥陀仏の正覺住持力によって二乗を求める心を止むという三義を説いて、止とは止惡であるとする。本

来、奢摩他というのは、『瑜伽師地論』卷七十七に、

即於_下如_レ所_レ善思惟_一法_一。獨處_一空閑_一作意思惟。復即於_レ此能思惟心_一。内心相續作意思惟。如_レ是正行多安住故、起_レ身輕安及心輕安_一。是名_レ奢摩他_一。⁽²³⁾

と説いているように、心を法に止住して、それを作意し思惟することによって、身心の輕安を得て寂靜三昧となることをいうのであり、止惡という意味は含まれていない。この止惡が得られる理由は、上卷の国土莊嚴第一、清淨功德偈釈に、

此清淨是總相。佛本所_レ以起_レ此莊嚴清淨功德成就_一者、見_レ三界_一是虛偽相是輪轉相は無窮相、如_レ虱蠖循環_一如_レ蠶繭自縛_一。哀哉衆生締_レ此三界_一顛倒不淨。欲_下置_レ衆生於不虛偽處於不輪轉處於不無窮處_一得_中畢竟安樂大清淨處_一。是故起_レ此清淨莊嚴功德_一也。——(中略)——此三界蓋是生死凡夫流轉之閻宅。雖_レ復苦樂小殊脩短暫異_一。統而觀_レ之莫_レ非_レ有漏_一。倚伏相乘循環無際。雜生觸受四倒長拘。且因且果虛偽相襲。安樂是菩薩慈悲正觀之由生、如來神力本願之所_レ建_一。⁽²⁴⁾

と説いていることから窺える。この三界は、虚偽相・輪轉相・無窮相、つまり惑・業・苦の世界であり、衆生はこの三界に縛られて生死流転している。その衆生に畢竟安樂大清淨処を得さしめるために、本願力をもって建立されたのが淨土であるとする。従って、この三界を勝過した清淨世界である淨土に心を止めて願生の想いをなせば、その不可思議力によって一切の惡を止め、淨土に往生すれば三業の惡・二乗を求め心を止めることができるのである。このように曇鸞は、作願門というのは、此土において奢摩他を修すというものではなく、奢摩他を修せんと欲して淨土願生の心を起こすものであり、その結果、止惡・往生という功德を得て、奢摩他を成就するものと解釈するのである。

そして、この作願門に続いて、次の觀察門を修すのである。

觀察門については、下巻の起觀生信中、觀察門釈に、

云何觀察。智惠觀察。正念觀_レ彼、欲_レ如_レ実修_レ毘婆舍那_一故。訳_レ毘婆舍那_一曰_レ觀。——(中略)——毘婆舍

那云_レ觀者亦有_二義_一。一者在_レ此作_レ想觀_レ彼_二三種莊嚴功德_一。此功德如_レ実故修行者亦得_二如_レ実功德_一。如_レ実功德者決

定得_レ生_レ彼土_一。二者亦得_レ生_レ彼淨土_一。即見_レ阿_レ弥陀佛_一。未_レ証淨心菩薩畢竟得_レ証_二平等法身_一、與_二淨心菩薩_一與_二上

地菩薩_一畢竟同得_二寂滅平等_一。是故言_レ欲_レ如_レ実修行毘婆舍那_一故。彼觀察有_二三種_一。何等_二三種_一。一者觀_レ察_レ彼佛国土莊

嚴功德、二者觀_レ察_レ阿_レ弥陀佛莊嚴功德、三者觀_レ察_レ彼諸菩薩莊嚴功德。心緣_二其事_一曰_レ觀、觀心分明曰_レ察。⁽²⁵⁾

と説いている。すなわち、觀察の觀というのは心にその事を緣することであり、察というのは觀心が分明であること

を言うとする。そして毘婆舍那を觀というのは、(1)此土において淨土の三種莊嚴を觀すること。(2)淨土において阿弥

陀仏を見奉ることであり、その功德によって、(1)淨土往生、(2)寂滅平等を得るのである。このように、曇鸞は

毘婆舍那に_レ此土での觀察と淨土での見仏の二義を説くのであるが、觀という語については、心にその事を緣すること

であるとし、_レ此土での觀察は、想を作して淨土の三種莊嚴を觀することであるとしている。本来、毘婆舍那というの

は、『瑜伽師地論』卷七十七に

即於_レ如_レ所_二善思惟_一法内_三摩地所行影像_一、觀察勝解捨_レ離心相。即於_レ是_三摩地影像所知義中_一、能正思擇最極

思擇、周遍尋思周遍伺察、若_レ忍若_レ柔若_レ慧若_レ見若_レ觀、是名_二毘鉢舍那_一。⁽²⁶⁾

と説いているように、奢摩他寂靜三昧の境地に現れる影像を智によって選びとることであるから、曇鸞のいう_レ此土での觀察とは異なるものである。曇鸞の説く_レ此土での觀察は、むしろ憶念に近いものであると思われる。曇鸞の_レ此土で

の觀察については、上卷の仏莊嚴第二、身業功德成就偈釈に、『觀無量壽經』第八像觀の文を解釈して、

身名_一集成_二、界名_三事別_一。如_二眼界縁_一根色空明作意五因縁生名爲_三眼界_一。是眼但自行_二己縁_一不行_二他縁_一。以_三事別_一故。耳鼻等界亦如是。言_三諸佛如來是法界身_一者、法界是衆生心法也。以_三心能生_一世間出世間一切諸法_一故、名_二心爲_一法界。法界能生_三諸如來相好身_一亦如_三色等能生_一眼識。是故佛身名_二法界身_一。是身不行_二他縁_一。是故入_二一切衆生心中_一。心想佛時是心即是_三三十二相八十隨形好者_一、當衆生心想_二佛時_一佛身相好顯_二現衆生心中_一也。⁽²⁷⁾

と説いていることより窺える。すなわち曇鸞は、仏身というのは衆生の心を縁とするものであり、衆生が仏を想う時、仏身相好は衆生の心中に顯現するものと解釈するのである。そしてこれは仏身のみではなく、淨土の三種莊嚴すべてに共通するものと考えることができる。従って、たとえ憶念であっても、仏の側から衆生の心中に顯現するというのであるから、その功德は如実であると言える。このように觀察門というのは、作願門で修したところの願生心の上に立って淨土の莊嚴を心に想い描くことであり、その結果、往生という功德を得、毘婆舍那を成就して阿弥陀仏を見奉り、寂滅平等を得るものと解釈していると言える。

最後に回向門については、下卷の起觀生信中、回向門釈に、

云何廻向。不_レ捨_二一切苦惱衆生_一。心常作願廻向爲_レ首得_レ成就大悲心_一故。廻向有_二三種_一。一者往相、二者還相。往相者、以_二己功德_一廻_二施一切衆生_一作_三願共往_一生彼阿弥陀如來安樂淨土。還相者、生_二彼土_一已得_二奢摩他毘婆舍那_一方便力成就、廻_二入生死稠林_一教化_二一切衆生_一共向_二佛道_一。若往若還、皆爲_二拔_一衆生_二渡_一生死海_上。是故言_二廻向爲_一首得成就大悲心_一故。⁽²⁸⁾

と説いているように、回向には此土における往相と、淨土における還相の二種があるとす。その中、還相というの

は、浄土に往生して奢摩他・毘婆舍那を得て方便力を成就した上で修すものであると解釈している。

以上が曇鸞の五念門に対する解釈である。五念門の中、作願門以降は、此土・浄土双方での行が説かれていた。これは、五念門という行が此土のみでなく浄土においても修されるべき行であるということであり、浄土に往生することを通じて、五念門がさらに高度な行へと発展することを明かすものと言える。この五念門という行は、一々の門を個別に修すものではなく、総括して一つの行として説かれたものであるが、浄土往生という点から考えれば、称名念仏が説かれる讚歎門が中心となるものと言える。これは、十念による往生が説かれている点からも窺い知ることができる。従って、此土における五念門という行は、讚歎門に説く称名念仏を中心とするものであり、礼拝門では帰命礼拝、作願門では願生心、観察門では作想による観、回向門では往相回向を修すものである。そして五念門を修して浄土に往生して後に、本来の意味での奢摩他・毘婆舍那を修し、奢摩他・毘婆舍那を成就することによって、自利の行を満足して方便力を得る。そしてさらに、方便力によって還相回向を修し、回向門を成就することによって、利他の行を満足して早作仏を得るのである。

このように曇鸞は、五念門という行を、浄土往生行であると同時に、自利利他二行を兼ね備えた大乘菩薩行の実践として捉えていたと言えるが、五念門が往生を契機として、より高度な行へと発展する理由は、曇鸞が行者を凡夫と捉え、阿弥陀仏の不可思議力を根底に置くからであると言える。そのことは、下巻の末に、

問云。有_二何因縁_一言_二速得成就阿耨多羅三藐三菩提_一。答曰。論言、修_三五門_一行_二以_二自利利他成就_一故。然覈求_二其本_一、阿弥陀如来為_二增上_一縁。——（中略）—— 凡是生_二彼浄土_一及彼菩薩人天所起諸行、皆縁_二阿弥陀如来本願力_一故。何以言之。若非_二佛力_一、四十八願便是徒設。²⁸⁾

と説き、その後、第十八念仏（十念）往生願、第十一住正定聚願、第二十二必至補処願を説いている点からも窺い知ることができる。つまり五念門は、阿弥陀仏の本願力を増上縁として成り立つ行であり、本願力を縁とすることに於て、浄土往生を通じて高度な行という果を得るのである。すなわち、第十八願を縁として五念門を修せば、その果として浄土に往生することを得て奢摩他・毘婆舍那を得る。そしてその果を得た上で第十一願を縁として奢摩他・毘婆舍那を修せば、阿弥陀仏を見奉る功德によって寂滅平等を得て自利行を成就する。そしてさらに第二十二願を縁として自在に衆生を教化し利他行を成就すれば、自利他二行の成就によって早作仏を得ることができるのである。このように五念門という行は、阿弥陀仏の本願力を根底として成り立つ行なのである。

四、結 び

曇鸞の往生に対する理解は、単なる無生の義に止まるものではなく、無生而生、見生而無生の義を明かすものである。これは、念念相続による因縁生という無生の義を知らなくても、阿弥陀仏の本願不可思議力によって浄土に往生し、無生の智を得ることができることを明かすものであり、『往生論註』の冒頭に説かれる、「但だ信仏因縁をもって浄土に生ぜんと願すれば、仏の願力に乗じて便ち彼の清浄の土に往生することを得、仏力住持して即ち大乘正定之聚に入る。」という旨を明らかにしたものである。そして往生行として説かれる十念・五念門というのは、阿弥陀仏の本願力を根底として成り立つものであり、決定の信とその信の相続を具象化したものである。このように、『往生論註』というのは、まさに信仏因縁を説くものであり、凡夫の往生を明かしたものであると言えるが、五念門という行

は単なる往生行に止まるものではなく、浄土往生を通じて修される大乘菩薩道の実践であり、早作仏のための行として説かれたものである。そしてまた、五念門が往生を通じて修される行であるからこそ、凡夫に修することが可能となるのであり、早作仏を得ることが可能となるのである。

曇鸞が、大乘菩薩道の実践としての五念門を重要視した理由は、下巻の善巧撰化中、巧方便回向釈に、

案王舍城所説無量壽經、三輩生中雖行有優劣、莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心即是願作佛心。願作佛心即是度衆生心。度衆生心即攝取衆生。生有佛国土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也。若人不發無上菩提心、但聞彼國土受樂無間、為樂故願生、亦當不得往生也。³⁰

と説いているように、浄土に往生するためには、必ず無上菩提心を発さなければならないと捉えていたためであろう。そして菩提心を発して浄土に往生すれば、浄土は畢竟清浄処であり有仏の土であるから、大乘菩薩道を実践することが可能となるのである。このように曇鸞は、単に浄土に往生することを目的とするのではなく、大乘菩薩道を実践する過程として、浄土往生を説くのであり、大乘菩薩道の実践であるからこそ、自利利他二行を兼ね備えた五念門という行が必要となるのである。この五念門という行は、世親が、別時意趣として否定されていた発願・称名に、止観という高度な行を組み込むことによって、大乘菩薩道の実践という地位にまで高めたものと言える。³¹そして曇鸞は、その五念門に本願行という新しい価値を付加し、万人が修すことのできる早作仏のための行としたのであるから、浄土教は、曇鸞の『往生論註』に至って、まさに大乘仏教の究極の教えへと発展したと言えるのではないだろうか。

註

- (1) 『統高僧伝』卷六、曇鸞伝。『大正新修大藏経』(以下『大正』と略す)五十卷、四七〇頁上)下
- (2) 『浄土宗全書』(以下『浄全』と略す)一卷、二一九頁上
- (3) 『世親の浄土論』(昭和四一年、法蔵館)一八頁
- (4) 『浄全』一卷、二三四頁下)三三五頁下
- (5) 『浄全』一卷、二二〇頁下
- (6) 『浄全』一卷、二二二頁下
- (7) 仮名という語について、幡谷明氏は『曇鸞教学の研究』(一九八九年、同朋社)六九頁、一九八〜一九九頁において、『中論』第二四品一八偈、『大智度論』卷十二の仮名有説と、長尾雅人氏の所説を挙げ、仮名とは因施設 (upadaya-prāhapti) であるとされておられ、梶山雄一氏は、『書評、幡谷明著『曇鸞教学の研究』』、『親鸞教学』第五六号、一九九〇)一〇一〜一〇四頁において、仮名という語は、龍樹の『因縁心論頌・釈』に説かれる、本体として自我の無いこと (svabhava-atmārahita) の漢訳であろうとされている。『往生論註』に説かれる仮名という語は、従来は幡谷氏の説で解釈されてきたが、穢土仮名人浄土仮名人という場合の仮名という語は、我一心釈に無我を説いている点から考えれば、梶山氏の説の方がより文意に添うものと思われる。
- (8) 『大正』三〇卷、三三三頁中
- (9) 『浄全』一卷、二一九頁下)三三〇頁上
- (10) 藤堂恭俊氏は『天親と曇鸞の浄土教思想』(『講座・大乘仏教』5——浄土思想、昭和六〇年、春秋社)二〇九頁)二二〇頁において、曇鸞が、往生浄土を願う主体を認めようとせず、その空無を強調したばかりでなく、苦滅道聖諦(願生)と苦滅聖諦(無生)という範疇の異なりを無視してまで論議を重ねた理由は、前者は所依・所事をたてないのが中観論書の特徴であることによるものであり、後者は当時勢いの盛んであった般若・中観の学風に対し、中観思想に基づいた往生観・願生思想を示すことによって、浄土教に対する非難をくいとめる必要があったからであろうとされている。
- (11) 『浄全』一卷、二四五頁上
- (12) 『浄全』一卷、二四四頁下)二四五頁上
- (13) 『浄全』一卷、二五〇頁上)下

- (14) 『浄全』一巻、二四五頁下～二四六頁上
- (15) 『浄全』一巻、二四一頁上
- (16) 『浄全』一巻、二三六頁上～下
- (17) 『浄全』一巻、二三六頁下～三七頁上
- (18) 『浄全』一巻、二二〇頁下～二二頁上
- (19) 『浄全』一巻、二三八頁上
- (20) 『浄全』一巻、二三八頁上～下
- (21) 『浄全』一巻、二二一頁上～下
- (22) 『浄全』一巻、二三九頁上～下
- (23) 『大正』三〇巻、七三三頁下
- (24) 『浄全』一巻、二二二頁下
- (25) 『浄全』一巻、二三九頁下
- (26) 『大正』三〇巻、七三三頁下
- (27) 『浄全』一巻、二三二頁上～下
- (28) 『浄全』一巻、二三九頁下～二四〇頁上
- (29) 『浄全』一巻、二五五頁上～下
- (30) 『浄全』一巻、二五一頁下～二五三頁上
- (31) 別時意説と五念門の關係については、向井亮氏「世親造『浄土論』の背景——「別時意」説との関連から——」(『日本仏教学会年報』第四二号、昭和五三年) 一六一頁～一七六頁、藤堂恭俊氏、前掲論文、一八〇頁～一九六頁に詳説されている。

(付記)

本稿の制作にあたり、佛教学大学教授・藤堂恭俊先生から懇切なるご指導を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。